

小宮豐隆監修

井本農一・弥吉菅一
横澤三郎・尾形 仿 校注

校本芭蕉全集

第六卷

紀行・日記篇
俳文篇

角川書店

校本 芭蕉全集
第 六 卷

昭和三十七年十一月十五日 初版發行

定價 一〇〇〇圓

校注者

井本農一・弥吉菅一
横澤三郎・尾形 仂

發行者

角 川 源 義

印刷者

中 内 あ き 子

製本者

鈴 木 俊 一

發行所

株式會社 角 川 書 店

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替口座 東京 一九五二〇八番
電話九段 (331) 〇一二一(代表)

中光印刷・鈴木製本

落丁・亂丁本はお取替へ致します

目次

概説

麻生磯次 三

紀行・日記篇

井本農一校注 三
弥吉菅一

解題

三

凡例

四

野ざらし紀行

五

鹿島紀行

六

笈の小文

七

更科紀行

八

おくのはそ道

九

嵯峨日記

一〇

補注

一一

付録

曾良隨行日記

井本農一校注 二〇五

凡例

二〇六

日記本文

二〇八

俳諧書留

二一〇

おくのほそ道芭蕉足跡図

二一八

俳文篇

横沢三郎校注
尾形 二一

凡例

二二三

一 『貝おほひ』序

二二七

二 『十八番発句合』跋

二二〇

三 『常盤屋句合』跋

二二一

四 柴の戸

二二三

五 「我ためか」の詞書

二二四

六 「侘チすめ」の詞書

二二五

七 「芭蕉野分して」の詞書

二二六

八	乞食の翁	二九七
九	寒夜の辞	二九八
一〇	夏野画讃	三〇〇
一一	『虚栗』跋	三〇一
一二	歌仙の讃	三〇三
一三	土峰讃	三〇四
一四	馬上の残夢	三〇五
一五	竹の奥	三〇六
一六	粃する音	三〇八
一七	当麻寺まゐり	三〇九
一八	「木の葉散」の詞書	三一〇
一九	「きぬたうちて」の詞書	三一
二〇	「狂句こがらし」の詞書	三三
二一	酒に梅	三三
二二	一枝軒	三四
二三	三聖人図讃(イ)	三五

二四	「牡丹菫」の詞書	三六
二五	野ざらし紀行絵巻跋	三八
二六	三人七郎兵衛	三九
二七	自得の箴	四〇
二八	垣穂の梅	四三
二九	『伊勢紀行』跋	四四
三〇	四山瓢	四六
三一	「あけゆくや」の詞書	四〇
三二	「はつゆきや」の詞書	四二
三三	雪丸げ	四三
三四	閑居ノ箴	四三
三五	藪の梅	四四
三六	蓑虫説跋	四六
三七	『続の原』句合跋	四一
三八	「ほしさきの」の詞書	四三
三九	保美の里	四四

- | | | |
|----|------------|----|
| 四〇 | 権七に示す | 四〇 |
| 四一 | 「いざ出む」の詞書 | 四一 |
| 四二 | 杖突坂の落馬 | 四二 |
| 四三 | 歳暮 | 四三 |
| 四四 | 「二日にも」の詞書 | 四四 |
| 四五 | うに掘る岡 | 四五 |
| 四六 | 伊勢参宮 | 四六 |
| 四七 | 「梅稀に」の詞書 | 四七 |
| 四八 | 伊賀新大仏之記 | 四八 |
| 四九 | 葛城山 | 四九 |
| 五〇 | 「ほろほろと」の詞書 | 五〇 |
| 五一 | あすならう | 五一 |
| 五二 | 高野登山端書 | 五二 |
| 五三 | 早苗の讃 | 五三 |
| 五四 | 「夏はあれど」の詞書 | 五四 |
| 五五 | 美濃への旅 | 五五 |

七二	「田や麦や」の詞書	三九二
七三	野を横の前書	三九三
七四	高久のほととぎす	三九四
七五	奥の田植歌	三九五
七六	「かくれ家や」の詞書	三九七
七七	石川の滝詞書	三九八
七八	文字摺石	四〇〇
七九	「散うせぬ」の詞書	四〇七
八〇	「笠島やいづこ」の詞書	四〇八
八一	松島の賦	四二四
八二	天宥法印追悼	四二八
八三	西行桜	四三〇
八四	玉志亭の佳興	四三二
八五	銀河ノ序	四三三
八六	今町にて	四三六
八七	「薬欄に」の詞書	四三九

八八	「あか／＼と」の詞書	四三〇
八九	多田神社	四三三
九〇	温泉頌	四三五
九一	「さびしげに」の詞書	四三七
九二	「あさむつや」の詞書	四三六
九三	桂下園家の花	四三九
九四	紙衾ノ記	四四一
九五	「其まゝよ」の詞書	四四三
九六	「藤の実は」の詞書	四四四
九七	明智が妻	四四五
九八	山家の時雨	四四七
九九	少将の尼	四四八
一〇〇	花垣の庄	四五〇
一〇一	洒落堂記	四五一
一〇二	重ねを賀す	四五三
一〇三	水の音	四五五

一〇四	幻住庵記	四四
一〇五	四条の納涼	四七五
一〇六	雲竹の讃	四七六
一〇七	烏之賦	四七七
一〇八	卒都婆小町讃	四八〇
一〇九	落柿舎の記	四八三
一一〇	堅田十六夜之辨	四八七
一一一	成秀庭上松を誉ること葉	四八八
一二二	「蝶もきて」の詞書	四九〇
一二三	阿弥陀坊	四九二
一二四	『忘梅』の序	四九三
一二五	明照寺李由子の宿す	四九四
一二六	島田のしぐれ	四九五
一二七	「ともかくも」の詞書	四九七
一二八	栖去之辨	四九八
一二九	「花にねぬ」の詞書	四九九

一二〇	素堂寿母七十七の賀	五二
一二一	芭蕉を移す詞	五二
一二二	三聖図讃	五七
一二三	僧専吟餞別之詞	五八
一二四	許六離別詞（柴門ノ辞）	五〇
一二五	許六を送る詞	五三
一二六	弔 _三 初七日雨星 _一	五四
一二七	閉関之説	五五
一二八	悼松倉嵐蘭	五八
一二九	東順の伝	五三
一三〇	酒堂に贈る	五四
一三一	元禄辛酉之初冬九日素堂菊園之遊	五五
一三二	「四つこき」の詞書	五六
一三三	「ちさはまだ」の詞書	五七
一三四	「稲づまや」の詞書	五八
一三五	「おもしろき」の詞書	五九

存疑の部

- | | | |
|---|-----------|-----|
| 1 | 「低ふ来る」の詞書 | 五四三 |
| 2 | 「霞やら」画讃 | 五四四 |
| 3 | 金竜寺の桜 | 五四五 |
| 4 | 黒髪山 | 五四六 |
| 5 | 萩と月 | 五四七 |
| 6 | 汐路の鐘 | 五四七 |
| 7 | 鉢たたきのうた | 五四九 |
| 8 | 春興 | 五五〇 |

一三六 笠の記

一三七 杵折讃

一三八 机の銘

一三九 塔山送別

一四〇 西行像讃

一四一 色と義

一四二 贈風絃子号

五五〇

五四五

五四七

五四六

五四九

五四三

五四四

五四三

五四五

五四六

五四七

五四九

五四三

五四四

五四五

五四六

10 9
「瓢の銘」

補注

硯石

五五 五三 五一

概説

一

芭蕉は延宝八年（一六八〇）三十七歳の時に、市中放浪の生活をうちきって、深川の芭蕉庵に居を定め、その庵は天和二年（一六八二）冬類焼して甲州にのがれ、貞享元年（一六八四）八月には関西旅行に出かけるといふように、元禄七年（一六九四）大坂で没するまで十年余りの間、旅で暮らすことが多かった。そしてその間に『野ざらし紀行』『鹿島紀行』『笈の小文』『更科紀行』『おくのほそ道』などの名作を残したのである。

俳諧の宗匠として芭蕉庵に納まってさえいれば、安楽な生活ができたはずである。しかも安易な道を避けて、しばしば險難な旅を選んだのであるが、その旅の動機については、『おくのほそ道』の冒頭に、「予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」といい、「そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず」と、芭蕉自身も告白している。すなわち芭蕉の旅は、漂泊の思いを満足させるところに根本の動機があったのである。

貫之の『土佐日記』以来、わが国には紀行文学が少なくないが、例えば『土佐日記』の旅は、京へ帰

任の旅であり、阿仏尼の『十六夜日記』は、訴訟のための鎌倉への旅であったというように、その多くは公私なんらかの理由のある旅であって、旅そのもののための旅は甚だ少ないのである。ところが芭蕉の旅は純粹に風雅の旅であり、旅そのものを目的とした旅であった。『鹿島紀行』などには信仰めいた目的があったようにも考えられるが、これも「かしまの山の月見んと思ひ立」った旅であり、『おくのほそ道』の旅では、結果においては新風を普及させることにもなったが、そもその出発点は道祖神のまねきにあい、漂泊の思いやまずして旅に出たのである。

かように純粹な旅そのものに対するはげしい愛情は、紀行文の第一作である『野ざらし紀行』にすでに現われている。芭蕉はその首途にあたって、「野ざらしをこゝろに風のしむ身かな」という句をよんだ。芭蕉はその時四十一歳で、老人というほどではなかったが、生れつき頑健な身体ではなかった。病弱な自分は、今長途の旅に出ようとしている。いどこで倒れるかもわからない。野原に横たわっている餓餓がふつと頭をかすめる。秋風にさらされている餓餓はやがて自分の身の上であるかもしれない。ちやうど季節も秋で、川のおもてを吹く冷い風が身にしみわたるような感じがするというのである。彼は悲壯な思いをいだいて旅に出たのである。このせっぱつまった感じは、『笈の小文』になると、「旅人と我名よばれん初しぐれ」というように、自分の姿を客観するゆとりができていますが、しかもなお「神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して」という言葉を添えており、『おくのほそ道』には、「躰旅辺土の行脚、捨身無常の観念、道路にしなん、是天の命なり」ともしるされている。この紀行の冒頭に、「古人も多く旅に死せるあり」とあるのも、河内の弘川寺で入滅した西行や、箱根の湯